

幼児の嗜好性に着目した絵本選択方法の検討

小林 希美

家庭や図書館においては、さまざまな方法によって子どもへの本が選ばれている。特に、幼児に向けた絵本選択の際には、“一般的、社会的に価値が高いとみなされた図書や雑誌などの資料”と定義される「良書」のリストが利用されている。しかし、「良書」は必ずしも読み手の幼児の好む絵本であるとは限らない。また、「良書」に対し、特定利用者の能力、性格、嗜好に適した図書や雑誌などの資料を「適書」と言う。幼児が好む絵本を読むことは読書への動機付けにつながるが、嫌いな絵本を薦められると読書嫌いになることもあるため、「良書」の中でも読み手の幼児の好む絵本が幼児個人に適切な絵本であると考えられ、本研究では「良書」の中で幼児個人の好む絵本を「適書」と定義する。「適書」を選ぶためには、「良書」の中から幼児個人の好みに合った絵本を選び出すことが必要であるが、公共図書館の読書サービスの現場において幼児一人ひとりの好みを把握することは難しい。そこで、幼児の嗜好性を手掛かりとして、本研究で定義する「適書」を選び出す方法を検討する必要がある。

そこで、本研究では、幼児の嗜好性に着目し、以下の3点を検討することを目的とした。第1に、幼児が好む絵本の特徴を検討した。第2に、幼児が嫌う絵本の特徴を検討した。第3に、読書サービスの現場で従来よりも「適書」に近いものを利用者に提供することを目指して、幼児の嗜好性に着目し、絵本を選び出すための方法についての検討を行った。

予備調査では、文部科学省により“子ども読書活動優秀実践図書館”として表彰を受けた関東圏の図書館32館を対象に、質問紙調査を幼児向けブックリストの送付を依頼した。ブックリストへの掲載数が4以上だった絵本36冊を、本研究で用いる良書リストとした。

調査1では、5・6歳児クラスの幼児39名(男児20名、女児19名)を対象に、読んだことのある絵本や好きな絵本、嫌いな絵本について尋ねる面接調査を実施し、絵本の内容分析を行った。調査2では、調査1の対象となった幼児の保護者に対して、幼児の嗜好性や幼児に薦めたい絵本に関する質問紙調査を実施した。その後、嗜好性ごとの幼児が好む絵本の傾向に差があるか検討した。

分析の結果、主に以下の3点が示唆された。第1に、幼児が好む絵本の特徴として、絵の彩度が高く、アニメ的であり、背景として現実的な世界が描かれているページが多くの幼児に好まれやすいことが示された。また、絵本の登場人物について、人間以外の生物が登場するページが多くの幼児に好まれやすいことが示された。第2に、幼児が嫌う絵本の特徴として、恐怖を喚起する要素が含まれる絵本は多くの幼児に嫌われやすいが、一部の幼児には好まれる絵本となることが示された。第3に、幼児の動物への嗜好性に着目すると、小動物が好きな幼児は、小動物が中心人物である絵本を好みやすいことが示された。

今後は、幼児や保護者の事前の読書経験について統制を行った上で、より多くの幼児を対象として調査を行うことが望まれる。

(指導教員 鈴木佳苗)